

此の質問を受けるに浪子夫人は。

「はい加害者は確に判明して居ります」

「えッ……何者ですか奥さん」

警官の双眼は異様に輝いた、すると浪子夫人は落ちつき拂つて

「憎むべき加害者は数日前不都合が在りまして家出を致しました

義理在る娘の竹子と申す者でございます」

と、答へた浪子夫人の面上には自分の微傷を喜ぶのか夫れども

他に理由が在るのか此の時會心の笑みが浮んだ。

(三十九)

流石の警官も此の一言には大に驚いたと見え、再び夫人に向つ

て。

「奥様、本職の御質問は加害者捕縛上の参考に致すのですが唯今

のお言葉はお間違ひではございませんまいな」

念を押された浪子夫人は。

「仰せまでもございません、妾くしども他人が自分の娘かを間違

ひます程慌てゝは居りません、不束ながら妾しも男爵本山利武の

妻でございます」

「イヤ決して奥様のお言葉を信せぬのでは在りませんが餘り意外

の出来事でございますから」

と、答へた警官は再び浪子夫人に向て。

「就ては奥様は是れから御歸邸なさいますか夫れども今晚は當ホ

テルへ御一泊になりますか」

「はい別に大した事も在りませんから貴官のお調べが済みましたら直ぐに戻らうと思つて居ります」

「左様ですか、夫れではどうぞお取りなすつて下さいまし。本職達は之れから一應當ホテルの使用人を調べまして歸署致しますから」

「左様なれば是れで失禮を致します」

と、微傷で濟んだ浪子夫人は待たせて在る抱へ車に乗つて邸へ歸つしてまつた、警官達は後とへ残つて一應の取調べをした後ち所轄日比谷署へ引き上げ直ちに加害者の行方を捜査したが浪子夫人の云ふ如く數日前に家出をしたのみで少しの手懸りも無い。夫れに日比谷署の署長も少しく思ひ當る事があると見え部下に向つて。

「兎に角此の事件には裏面に種々の事情が伏在して居るから假令犯人の竹子と云ふ令嬢を捕縛しても直ぐに男爵家から取り下げに來るに違ひないぞ、現に麴町署へも家出した令嬢の失踪届が未だして無い位だ。」

と、云つて其の夜は普通の犯人を取押へやうとするやうに極力捜査の歩を進めなかつた、斯る意外の椿事が起つたとは夢にも知らぬ今戸の松野の家では姉の戻りを待つて居る竹子が餘り歸の運いのを心配して。

「ねえ姉さんは芝居へ行くと何時も斯んなに遅くなるのですか」

早や柱時計が一時を打つたので斯う云つて先きへ寝かけた女中に聴くと。

「本當に妙でございますねえ、今日まで幾ら遅くなりまして十

二時半を過ぎた事は無いのですが」

と、女中も不審を起して

「何んなら自働電話で帝劇へ聴いて参りませうか」

「もう遅いから可いわ、其の中にお歸りになるでせう」

と、竹子は心配の餘り床にも入らずに起きて居たが二時も過ぎ三時も打つたのに未だ姉は歸つて来ない。

「本當にどうなすつたのだらう、お友達の處へお泊りになるなら何んとか知らして来るだらうに」

と、小さき胸を痛めて居たが折り柄其の朝の新聞が早くも配達されたと見え玄關の中にハカリと音がしたので。

「もう床へ入つても直きに夜が明けるから新聞でも読みませう」  
と、何心なく其の新聞を取り來り電燈の下で読み始めた竹子は

不圖二號標題の本山夫人の危禍の一項に目が付き。

「あらッ……」

と、云つて約一段ばかりの記事を熱心に讀んで居たが最後まで讀み終らぬ中に。

「タ……大變な事が出来たわ……」

と、絶叫して熱い涙を紙上へハラ／＼と落とすと共に顔色を變へて起ち上つた。

(四十)

何か一大事でも起つた様な竹子の態度を眺めた女中は。

「お嬢様何か變つた事でも出来たのでございますか」

ハツと氣の付いた竹子は。

「いゝえ……」

と、口籠つた竹子は四邊りを見廻し乍らホツト溜息を吐き

「實は小説の讀物で、妾しが可哀想だと思つて居る方がトウく自殺をしてしまつたわ」

と、云ひ乍ら其の新聞を懷中に入れてしまつた。

「あら左様でございますか、私しは亦たごんな事が出来たのかと思ひまして本當に吃驚り致しましたわ」

竹子の態度に驚いて暫く呆氣に取られて居た女中は其の真相を聽いて安堵の胸を撫で下ろした。

「あの妾しは御飯を濟してから一寸外出する心算りですから濟みませんけれども成る丈け早く仕度くをして頂戴な、實は姉さんに

頼まれた買物に行くのですから」

何んにも知らぬ女中は。

「はい畏りました……」

と、命せられるまゝに勝手許で七輪に火を起し始めた、其の隙を窺つた竹子は萬一や遺書でも残しては無いかと姉と共用の鏡臺の抽斗を明けて見ると果して一通の書面が出て來た。

「あッ……矢ッ張り」

と、口の中に叫んで封切る手も遅しと披いて讀むと始めて姉の本心が判つた。

「ね……姉さん……難有うございます妾くしのやうな者を妹と思つて下さればこそ今度のやうな事をなすつて」

と、其の書面を赫々と抱きしめて泣く音を忍んだ。

「新聞の様子では姉さんが幸か不幸か其の本望をお達しにならないので其の面を見られないと思つて何處へか姿を隠くしになつたのに繼母さんは警察官に加害者は此の妾しだと訴へて居らつしや

る」  
と、心の中に嘔きつゝ、稍や暫く考へて居たが旋がて頭を上げる

「姉さんをお救い申さう、どうせ一度は死なうと覺悟をした身体だから」

再び斯う獨語した竹子は意外にも晴々しい面を上げて佛壇の前に座ると今度は稍や暫くの間は無言のまゝで何か祈りを捧げて居た。

「あの御飯の仕度くが出来ましてございますが直ぐに召し上りま

すか」

「あゝ左様ですか……」

強いて笑みを浮べた竹子は高まる胸の動悸を押さへるやうに手早く食事を済ませると。

「夫れでは一寸行つて來ますから留守をお頼み申しますわ」

「はい畏りました、どうぞ御悠り行つていらつしやいませ」

女中は竹子姉妹の身の上に聴くも恐しき問題が起きて居るとは少しも知らぬから常の如く愛想好く竹子を門口まで送り出したすると二三間行つた竹子は急に戻つて來て。

「夫れから誰れか妾しを尋ねて來る人が在つたら日比谷警察へ行つたと云つて下さい」

警察と聽いて女中は變な顔をしたが。

「長りました……」

と、答へて家の中へ入つてしまつた、竹子は家を出ると萬一や途中で刑事などに捕へられるやうな事がありはしないかと心配して夫れと無く電車の中でも注意をしたが別段さうした事も無く無事に日比谷署の受付に立つことが出来た。

「お願ひでございます、妾くしは昨夜日比谷ホテルの玄關先まで恐しい罪を犯した者でございますが到底逃げ隠れの出来ぬことが判りましたので自首を致しました」

斯う云つて訴へ出でると、電話口で何か頻りと通話して居た一人の警部が話しを途中で切つてツカ／＼と受付の處へ駈けて來た。

（四十一）

受付け口へ行んだ警部の双眼は、忽ち異様に輝いた。

「貴女が番町に居られる本山男爵の令嬢竹子さんですか」

流石に警部は相手が身分在る人の令嬢と思ふので其の質問は至つて丁寧であつた竹子は斯んな場所へは生れて始めて來たのであるから覺悟はして居るが知らず／＼の中に五体を震はし。

「はい左様でございます、仰せの本山の長女竹子でございます」

明瞭と答へると警部は一寸頷いて。

「良く自首をなされた」

凜然たる一語を竹子を與へた後ち。

「おい村岡巡査、此の婦人を本職の前に連れて来なさい」  
受付け巡査に斯う命令を下した警部は、佩劍の音さへ荒々しく  
踵を返へしたが其の足で再び電話口へ立つて諸方へ向つて捜査中  
止を命じて居た。

「御苦勞だごもう警戒を解いて呉れ、第一君の見込みは違ふよ肝  
腎の本人はモウ本署へ自首して出たよ」

おすく、警部の席の前へ悄然として佇立んだ竹子は警部の通話  
して居る用件が自分の事であると共に此の様子では姉はまだ何れ  
にか潜伏して居るに違いないと小さな胸の中に悲喜の情が油然と  
して起るのであつた、やがて電話口を離れた警部は自席の椅子に  
ドツカと腰を下ろし。

「お嬢さん……」

ど、眼鏡越しに美しき竹子の面上をチツと眺めた後ち言葉を重  
ねて。

「實に威いことをお演りなすつたのう」

言葉も態度も頗る柔しいけれども警部は竹子の一舉一動に依つ  
て、此の可憐なる美人の胸の奥底に秘めるある恐ろしい大罪の動  
機を看破しやうとするのである。

「誠に恐ろしい罪を犯しましてごさいます實は一旦はあの場から  
逃げ延びやうと思ひましたのでございませすが何分にも良心の呵責  
に堪へませんので自首を致しました……」

竹子は何を思ひ出したのか俄にハラ／＼と涙を流し。

「此上は速に法に従ひまして御處分を受けたくございませす」  
其の言語には少しの淀みも無く、其の舉動にも少しの亂れが無

い、警部は此の言葉を聴くと暫く何か深き考へに沈んで居たが。

「令嬢……兎に角其の椅子へ腰をお下ろしなさい」

と、云つて今度は約五分間も竹子の面を覗めて居たが。

「仰しやる事は良く判りました、然し令嬢假りに親と名の付く方を亡き者にしやうと刃物で斬り付けるには何か夫れだけの動機が在るのでせう、天下の法律は罪人を罰する爲めにのみ設けて在るのでは在りません、法律にも涙がありませんぞ、法律にも同情が在りませんが、其の涙と同情が即ち情狀酌量と云ふ四文字を産むのです本官は貴女が数日前に家を出られた事も探つて在ります、さうして學校に於ては多くの生徒のお友達から尊敬を拂はれて居られた事も探りました、夫ればかりでは無い近頃の女學生のやうに不品行で無い真に得難き淑女であられる事も探りました、其の貴女

部は。

自分の卓上に泣き伏した竹子の白き襟足をパツと眺めて居た警部は。  
「令嬢、さア水が來ました、夫れを飲んで心を鎮めてお話しなさい」

が恐ろしい謀殺未遂……然かも相手は母アさんです、之れには何か原因が在るのでせうから悪い事をしたと思つて自首したからには其の原因もお述べなさい」

「は……はい……申上げます」

と、微かに答へた竹子は身を震はせて涙の面を警部の卓上に伏せた。

(四十二)



い

「はい……」

と、面を擡げた竹子は。

「御親切のお言葉を伺いますに付きましても犯した自分の罪が恐ろしいございませぬ、實は是れと申して深い動機はございませぬので唯だ少しばかり母様の仰しやる事が其時に限つて御無理のやうに思はれましたので遂にフラ／＼とあんな氣になりました恐ろしい罪を犯しましてございませぬ、常に繼母様からは海山の御恩を受けて居り乍ら、女の浅い考へから飛んでも無い事を致しまして家の名譽を傷けましたのは兩親は勿論御先祖様に申譯けございませぬ、夫ればかりか同族の皆様に申し譯けがございませぬと、竹子は再び熱き涙を双頬に流すのであつた。

すか

「はい……」

「夫れから男爵は目下御旅行中と云ふ事だと聽きましたか事實で

「さうすると何か思案に餘る事があつて遂にフラ／＼とあんな恐ろしい氣になつたのですな」

警部は殊更らにフラ／＼と云ふ一語に力を籠めた。

「はい父の留守中に飛んでも無いことを致しまして何んとも申譯けありません」

警部は軽く首肯して竹子に向ひ。

「良く判りました、兎に角奥様から犯人は貴女だと訴へられた以上は致し方が在りませぬから貴女はお歸へし申すことは出来ませぬぞ」

「はいお上の御用で關西地方へ出張中でございます」

「左様ですか兎に角其の中には御邸から願ひ下げがあるでせうが夫れまでは不自由を我慢なさい、尤も當署では出來得る限り御便宜を圖つて上げる心算りですから公判廷で罪の確定する迄は輕擧な眞似をしては不可ませんよ」

「はい……」

竹子は同情ある此の警部の取調に對して厚く禮を述べて居ると受け付の巡査がツカ／＼と警部の前に來たり。

「あの本山家の御息で敏雄と云ふ青年が何か御参考に申上げ度い事が在ると云つて見えました。」

此の言葉を聞いた竹子が。

「えッ……」

と表の方を振り返つた竹子を眺めた敏雄が我れを忘れて。

「おう姉さんッ……」

と、絶叫して署内に駆け込もうとするど警部は之れを制し。

「君ッ、そんな亂暴をしては不可ん」

ハツと氣の付いた敏雄は。

「やッ……之れは失敬しました」

と、足摺りをして口惜しがった。

「おい村岡巡査、一寸彼の青年に逢ふから其の間此の婦人を署長室に入れて君が番をして居て呉れ」

「はい畏りました」

巡査は残り惜し氣な竹子を引立て、署長室に入つて行くど、入れ代つて敏雄を自分の前に呼び寄せた警部は。

「貴郎は本山男爵の御令息ですか」

「左様です」

何か憤慨して居る事が在ると見えて敏雄は突立つた儘唯だ——  
左様です——と一言の返答をした丈けで。

「外の事では在りません、姉さんは或る事情の爲めに數日前家を出たのは事實ですが今朝の新聞に在るやうな恐ろしい罪を犯かす方では在りません、此の點に就ては不肖本山敏雄が命を抵當にして保證しますから姉さんを放還して上げて下さいまし」

姉の身の上を思ふ敏雄が至誠の叫びは尠なからず警部を動かした、けれども肝腎の本人は既に立派に自首して出た後ちあるから警部は氣の毒さうに敏雄に向い。

「御令息……然し貴女の姉さんは當署が逮捕したのでは無いので

すぞ、御本人が今から一時間ばかり以前に自首して出られ、且つ昨夜の犯罪はモウ自白されて此の通り聞き取り書まで出来て居るのですぞ」

「えッ……姉さんが自首ッ……さうして彼の恐ろしい罪を自白ッ……」

と、絶望の聲を放つた敏雄は、我れと我が髮の氣を兩の手で掻き拷した。

(四十三)

敏雄は義姉の竹子が恐ろしい罪を自白したと聽いて半ば狂亂の態であつた。

「お係り夫れは嘘です、確に他に何か原因があるに相違在りませ  
ん」

係り警部は双腕を組んで何か考へて居たが旋がて靜に口を開き  
「本山さん、貴郎が義理ある姉さんの身の上を思つてさう仰しや  
る事は本官に於て参考として伺つて置きます、然かし乍ら御本人  
が何も彼も自白をなすつて居るのですからなア」

「さうですか、姉さんが御自分の犯した罪と云つて自首をなさつ  
た以上は今更ら申し上げる事も在りませんが」

と、屹々と面を正した敏雄は年に似氣なく泰然たる態度で。

「一家の秘事を私しから申し上げるのは實に忍びないのでござい  
ますが實は姉さんは御承知かも知りませんが双兒なのです、萬一  
其の双兒の一方が今度の大罪の犯人であつたら如何なりませう」

「成程……」

警部は一寸考へた後ち。

「然かし本山さん御本人が既に自白をなすつて居るのですから」

「然かし虚偽の自白であつたら」

警部はニッコリ笑つて。

「夫れが判明すれば無論無罪です」

「えッ無罪……？」

敏雄は忽ち其の面上に希望の色を輝し。

「是れは御参考に申し上げますが」

と、敏雄は自分の知つて居る今日までの事を落ちも無く語つた  
後ち。

「其の外に斯ういふ奴さへ在るのです」

彼の日の出新聞記者の田村勇の事や大磯の別荘守高橋市之助の憎むべき手段を語つた後ち。

「左様云ふ譯けですから先日田村の新聞に出た記事の如きは全然捏造したものなんです、夫れが爲めに姉さんは母校から當分停學を命ぜられて居るやうな始末なのですから萬々が一にも今度の事が姉さんの演じた兇行にもせよ、罪は……」

と、一旦言葉を切つて。

「ボ……僕の實母に在るのです、子として親の曲事を申し上げるのは實に忍びませんが家の大事には代へられませんが、其の代り僕は母に對して不孝の罪は充分に謝する唯一の方法も考へて居りますから」

健氣なる青年本山敏雄は斯う云つて警部の面上を仰いだ。

「貴郎の苦衷は良く判つて居ます、夫れでは本官は一應其の田村や高橋を拘引して取調べを致しますが夫れよりも必要なのは此の事件を社會に公表せぬやうに貴郎から母さんを説いて告訴を取り下げたら如何です」

敏雄は此の一言を聽いて天來の福音の如くに思つた、何故早く其處に氣が付かなかつたと徒らに警察へ來て一家の秘事を多少でも洩らしたのを悔いた。

「成程、夫れには少しも氣が付きませんでした、實は不在中の父へ斯う云ふ事を聽かし度く在りませんからどうぞ御内分に願います」

「承知しました、夫れでは少しも早く奥さんと御談合なすつて告訴をお取り下げなさいまし」

「はい……」

警部の注意を嬉しく聴いた敏雄は喜び勇んで直ぐに番町の自宅へ馳せ戻った、さうして母に向つて告訴の取下げを哀願するど。

「そんな馬鹿な真似は出来ません、お前は親を殺さうと思つた恐しい奴を庇ふつもりのかい……」

と、浪子夫人は柳眉を逆か立て、敏雄の要求を一言の下に反りた。

（四十四）

母の一喝に逢つても敏雄は却々屈しなかつた、彼れはチリ／＼と膝を進め。

「母アさん、貴女の御立腹は御尤千萬です、然かし母アさん僕は今度の事は義姉さんの演じた事とはどうも思はれないのです、多分加害者は第三者だらうと思ふのです」

浪子夫人は我子敏雄の面を冷やかに眺めると共に手にせる煙管に火を移し。

「假令第三者であらうと、何處の馬の骨で在らうと、夫れはお前が勝手に想像するのではないか、第一肝腎の竹子が日比谷署へ自首して出たと云ふでは無いか」

「ですから取下げを願ふのです、是れには僕として母アさんに申し上げ苦くい事情が伏在して居るだらうと思ふのです、要するに家の爲めです、我が本山家の名譽の爲めに貴女へお願い申すのです」

敏雄は今や熱心に母の心を騙へさんと思ふのであるが浪子夫人は少しも取り合ふ氣色も無く。

「何んですつて敏さん、モウ一度言つて御覽なさい」

「幾度申し上げても同じです徒らに黒暗の耻を世間へ公表しない方が得策だらうと思ふのです、また萬々ケ一にも義姉さんが母アさんに對して及物を向けたのが事實であつたら夫れこそ亦た何んとか方法が在らうかと思ふのです、現に日比谷署の係り警部も今の中なら取り下げる事が出来ると云つて居るのですからどうぞ熟くお考へ下さつて僕の希望を容れて下さいまし、子として大恩有る親に斯る御無理を願ふのは些さか常軌を逸して居るかも知れません、然かし僕は本山家代々の名譽を重んじてお願いをするので

と、双の手を突いて頭を下げた。

「不可ません、お前は二言目には家の爲めだとか、家の名譽だとか云ふが妾しは家の爲めを思ふから加害者が何者で在るか云ふ事を警官へ告げたんですわ」

「夫れがお考へ違いと云ふのです、第一父うさんの御不在中に斯んな不祥事の出来たのは言葉を替へて云へば母アさんの家事不取締りから起つたのです」

義姉の境遇に同情して居る敏雄は飽くまでも母に反省させやうと思切つて自分の思つて居る通りの事を述べた、すると浪子夫人は烈火の如くに怒り。

「夫れではお前さんは親を殺さうとした者へ無理な道理を付けて助けやうとするかい、いゝえお前は竹子と同腹で此の妾しを殺さ

うとするかい」

「ば……馬鹿な事を仰しやい、母アさんのお身の上を思ふから此度のやうな御無理を願ふのです」

「不可ません、假りにも親と名の付く者を殺さうなぞとした恐ろしい婦人は監獄に入れる方が可いのです」

と、浪子夫人はどうしても敏雄が切なる哀願を容れさうにも無い。

「ですが母アさん、姉さんも一時の迷いであんな真似をしたのでせうから、どうか勘辨して上げて下さい」

再び頭を下げた敏雄をハツタと睨んだ浪子夫人は。

「そんな碌でも無い心配をする時間でお前さんは勉強をなさい」  
敏雄は最早や是非なしと思つたのか、ハラ／＼と涙を流し。

「母アさん、是れ程お願い申してもお聞き入れが無いのなら是非も在りません、モウ二度と再び此の事に就てお願いを致しませんから御安心遊ばせ。」

と、云い放つと共に足音さへも荒々しく母親の前を辭した。

(四十五)

浪子夫人は敏雄が足音さへも荒々しく自分の部屋を出て行くのをニヤリと笑つて見送つて居た。

「本當に親の心持ちも知らない馬鹿正直の兒だねえ」

と、會心の笑みを洩らし。

「然かしモウ少し世間が判つて來ると妾しの難有いのが別つて來



るだらう」

不肖の兒ほど親は可愛い、焼野の雉子夜の鶴、子を持つ親の情けには身分の上下に差別が無い、まして我が腹を痛めた可愛い敏雄の云ふ處は義姉に對する温い同情が籠つて居るのであるから浪子も心の中では敏雄の行爲が心密そかに嬉しいのである。

「時節さへ來れば彼の兒にも妾しの心が判らうから今度は心を鬼にしやう」

斯う獨語した浪子夫人は何處へ送るのか二三通の書面を認め女中をして直ちに投函せしめた後ち何か一人で調べものを始めた。

「あゝ是非も無い事だ」

と、自分の部屋に駆け込んだ敏雄は机の上に面を伏せたまま、男泣きに泣き崩れて稍や暫らくは實母の冷たき意志を觸へすことが

出來ぬのを悶えて居た、やゝあつて蒼白な面を上げた彼れは。

「さうだ……此の上は父うさんの同情に訴へて義姉さんを助けやう」

と、淋しい笑みを浮べて起ち上つた。

「おいお兼ッ……」

と、母が氣に入りの女申を呼び。

「一寸外出するから母ア様がお聴きになつたら出掛けて留守だと申し上げて呉れ」

「はい畏りました、さうして若様は何處へ行らつしやいますのでございます、萬一急な御用でも出來ますれば、電話を掛けますから」

「何處へ行くか未だ緊りした當ては無いのだから母アさんが聴い

たら唯だ出掛けたと云つて置け」

「はい……」

女中が呆氣に取られて居るのを尻り目に掛けて我が家を出た敏雄は直ちに腕車を雇つて新橋停車場へ走らした、さうして間もなく發車する神戸行の急行列車の客となつてしまつた、彼れは。

「兎に角父うさんに逢つてお願いして見なければ判らんが何んとかして義姉さんを助けて上げ度いものだ」

と、心の中に囁やき乍ら風光明媚なる東海道の旅は名古屋近くで夜が明けたが送迎する美しき窓外の景色などは少しも眼には入らず京都へ着いたのは朝の八時過ぎであつた。

「京都……京都……」

と、車掌や驛夫の叫ぶ聲を背後に聴き流して下車した彼れは改

札口を出ると直ぐに車夫を呼んで父の宿泊して居る都ホテルへ腕車を走らした。

「入らつしやいまし」

と、番頭や手代に出迎へられると敏雄は車から下車して玄關口に佇立み。

「僕は東京の本山家の者だが、父う様が居らつしやるなら敏雄が急用が出来て伺つたと申し上げて呉れ」

手代達は叮嚀に頭を下げ。

「おや左様でございますか、實は御前様は昨夜東京から何か急な御用が出来たと云ふ急電が参りまして十二時二十分の夜行で御歸京になりましたでございます」

と、揉み手をしながら。

「兎に角トランクや其他の御荷物はまだお座敷に置いてございませうのですからお上り遊ばしてお休み下さいましては如何です」

「其れでは父う様は歸京したのですか」

と、敏雄は呆氣に取られて其の無駄足を悔んだ、と同時に父が俄に歸京した用件は必らず今度の事件に關聯してゐあらうが其の結果が果たして凶か吉かと心を痛めるのであつた。

(四十六)

敏雄は暫く都ホテルの玄関口で考へて居た、番頭等は異口同音に。

「若様、兎に角御前のお座敷でお休み遊ばしたら如何でございま

「では直ぐと歸京しやうと思ふけれども時間の都合が在るから急行の出るまで休んで行くよ」

「どうぞ左様遊ばして在つしやいました」

案内された父の座敷で敏雄は頻りと向後の進退に就いて考へた。

「萬一の事が在つたら僕は家を出てしまはう、左様すれば義姉さんに對する義理が済む」

と、最後の決心をして、其の夜の八時二十五分に京都を發する急行列車で歸京の途に就いた、静岡附近で夜が明けたので彼は箱根手前の山北驛で其の朝の東京新聞を二三枚買って黙讀して居たが何に驚いたか。

「あッ……」

と、絶叫して其の新聞紙を手から落した、敏雄の驚くのも道理であつた、其の記事と云ふのは義姉の身の上に関する事なので、然かも加害者は立派に自首して出て居るから其筋では事件を急速に解決する爲め豫審も開かずに本日第一回公判を開くと云ふのだ

「斯んな馬鹿な事があるのかしら」

と、敏雄は頻りに小首を傾けて居たが。

「父う様が俄に歸京した處を見ると或は事實かも知れんなア」

彼れは頻りに向後の成行を心配して居たが兎に角歸京してから事實を訊さうと思つて朝の食事もせず心をも痛めて居た。

「新橋……新橋……」

と、鐵道従事員の叫ぶ聲で始めて我れに歸つた敏雄は急いで構

外へ出て直ぐに腕車を丸の内の地方裁判所へ飛ばして見ると果して新聞の記事は事實であつて。

「おう若様ッ」

と、彼れの姿を見て走り寄つたのは家扶の鈴木徳太郎であつた

「ス……鈴木どうした……」

「御前様も御歸京になりました、昨夜取り下げの運動をしたのですがモウ手遅れでした、夫れから京都の都ホテルから貴様の事を知らして参りました、兎に角モウ公判廷が開かれますから傍聴席へ参りませう」

「ウム……」

敏雄は双眼に涙を浮べて傍聴席へ入つて見ると其處には殿村讓や妹の咲子を始め知つた顔の人が多く氣の毒さうに頭を垂れて居

た、やがて被告人の入口が開くと義姉の竹子は昨日に變る淺間しき深編笠を冠つて入つて來た、神聖なる公判廷も何んもなくサワ付いて來たと思ふと續いて彼の日の出新聞記者の田村や別莊守の高橋が繩付きで入つて來た。

「はてな……」

敏雄の面には些か希望の色が浮んで來た其の後とから證人として父や母も入つて來たので敏雄は遂にシク／＼泣き出した。

裁判官は型の如く證人に宣誓をさせた後ち。

「被告本山竹子……」

と、呼び上げた、廷内は一時に面を上げて可憐なる竹子に眼を注いだ、裁判官は竹子と證人たる母の面を眺め。

「改めて聽く必要もないが、お前の犯罪は警察署で自白した通り

に違いないな……」

竹子は徐ろに頭を下げ。

「恐れ入ります、日比谷署で自白を致し同署で假豫審を開かれました時申し上げました通り些かも相違はございません、恐ろしき大罪を犯しましてお上のお手敷を煩しますのは何共恐れ入ります」と、手にせる半巾で涙を拭つた、罪無くして恐ろしき罪に服せんとする竹子の態度は真に深かつた。

「ウム……」

と、首肯いた裁判長が倍席檢事を顧みると、檢事は轟乎と起つた、最早や如何なる求刑をするかと思つて傍聽人は期せずして檢事の方へ眼を向けた、此の刹那である多くの傍聽人を掻き分けて前へ出た一人の美人が。

「お係り様、一寸お待ち下さいまし、本山夫人に對する謀殺未遂の犯人は妾くしてございます」

と、絶叫した、此の聲に驚いて後しろを振り返つた竹子は。

「あッ……」

と、叫んで其の場へ泣き伏してしまつた、男爵夫妻は呆氣に取られ暫し其の美人を眺めて居たが男爵は見る／＼顔の色を變へてしまつた、傍聴席は廷丁の制止も聽かずに總立ちとなつた。

(四十七)

此の美人こそ竹子の姉の松子であつた、彼れは再び聲を張り上げ。

「御係り様、妾くしは決して無根の事を申し上げて當御法廷をお騒がせ申すものではございません、眞度く妾くしが本山様の奥方を殺害しやうとした眞の加害者でございますから然るべく御處分を願います」

と、少しも悪怯れたる風情が無い、係り官は此の婦人が飛び出した刹那に於ける本山男爵や浪子夫人の態度に徴して頗る心を動した。

「まア一寸待ちなさい」

と、松子を埒内に入れて置いて置いて判檢事は別室で密議を開いた、多くの傍聴人は如何なる結果を生むであらうと開廷の時を待つて居た、すると裁判官は別室から出て來ると。

「本事件の内容を公開する時は善良なる風俗を亂すの虞があるか

ら傍聴を禁止する」

と、嚴かに言ひ渡すと多くの傍聴人は口々に裁判官が傍聴を禁止した事に就て不平を云い乍ら出廷してしまつた。

「おいお前の言葉には偽りが無いであらうな、徒らに知人を救ふ量見で益も無い事をして爲めにならぬよ」

言葉優しく云い聴かす。

「いえ決して偽りではございません、是れに就きましては種々深い事情が伏在して居りますのですから一應妾くしの申し上げる事をお聴き下さいまし」

と、松子は親の素性から自分の目下の境遇を述べ續いて妹竹子が哀れなる身の上を落ちも無く談つた後ち。

「左様いふ次第で妾くしは一圖に本山の奥様が憎くなりまして恐

ろしい決心を致しましたのです、處が彼のやうに演り損じましたので一時逃れて居て再び時機を見計つた上でモウ一度お恨みの刃を向けやうと存じたのですが妹が妾くしの身を庇つて自首して出ましたから妾くしも初めの志を翻へしまして斯く神聖な公判廷をお騒がせ申した通りの次第でございます」

と、云ふべき事を云い盡くすと浪子夫人の面をハツタと睨み。「奥様先夜お命を頂戴致さうとしたのは妾くしでございますわ」

と、云ひ乍ら最後に。

「今も申し上げました通り妹の竹子に罪はございません、最も生きたる證據は自宅の女中をお呼出しになりましたしてお取調べになりますと一番早く判ります」

此の時辯護士はやをら起ち上つて。

「裁判官に一言申し上げます」  
と、前置きをして本山家は名譽の家であるから此の際事を社會に公けにせぬやうに可然き御處置を煩し度いと其の希望を述べた時。

「御係り様、妾くしの心得違いでございました、眞度妾くしが考へ違いから飛んでも無い御手敷を煩しましたばかりか本山の名譽を傷けました、どうか此の御方にも罪も無いのでございますから無罪に遊ばして下さいまし、其の代り妾は自分の罪に引受けます」

と、浪子夫人は公判廷へ泣き伏してしまつた、重ねくの出来事に裁判官も呆氣に取られて居たが。

「本山閣下、本日は一旦閉廷して後日お呼び出しを致しますが、

夫れに就て一言申添へるのは法には情實は在りませんが涙がありますから其のお含みで」

と、暗に取下げを勸めて席を起つてしまつた。

(四十八)

松子が潔き告白は今までの浪子夫人をして其の非を悔い改めさせた、姉妹が美しい情を眼前に眺めては今までの自分の行爲が耻かしくなつた、であるから浪子夫人は己れの非を申し立て、此の可憐なる二人を救はうとしたのであつた、雲に閉ざれて居た月は漸く晴れ渡る空に出た暫らく雪に惱んだ花も時が来て温き春風に吹かれる事になつた、裁判官が意味有り氣の一言を残して公判廷



を閉じたので邸へ歸つた本山男爵は直ちに殿村邸へ腕車を馳せて讓の後援を頼んで種々なる方面へ運動をした、さうして表向き告訴の取り下げを依頼した。

「松子さんは彼の儘拘留されて居ますし一件記録が検事局へ廻つて居りますから結果の如何は判りませんが兎に角御希望の叶ふやうに運動を致しませう」

日比谷警察署長も本山男爵の意中を諒として東奔走西して呉れた、其の結果破天荒にも關係者一同は放還される事となつた、唯だ日の出新聞社の田村と別荘守の高橋は他の犯罪が發覺して放還と同時に改めて検事から起訴されて再び細目の耻を見る事となつた。

今日は一同が放還されるので本山邸から數臺の腕車を以て出迎

へる事になつた、待ちに待つた時刻が來ると、松子と竹子の二人は満面に笑みを含んで検事局の裏門から出て來た。

「おう竹さん……」

と、我れを忘れて走り寄つたのは浪子夫人であつた。

「カ……母アさん……」

竹子は半年振りの繼母から柔しい言葉を掛けられたので無言の儘で嬉し涙を流した、すると浪子夫人は竹子の手を緊かど握りしめて。

「妾しの心得違いから本當に苦勞を掛けたねえ……」

と、云つて今度は松子に向い。

「松子さん貴女にも随分心配させましたねえ、今までの事はどうか水に流して下さいまし」

浪子夫人は今迷いの夢が覺めて居るのであるから松子の前に  
 丁寧(ていねい)に頭(かぶ)を下(くだ)げた、さうして二人の手を曳(ひ)いて男爵(男爵)の前に來たり  
 「御前(ごぜん)兎(う)に角(かく)松子(まつこ)さんにお言葉(ことば)を掛(か)けて下(くだ)さいまし」  
 男爵(男爵)は前夜(ぜんや)浪子(浪子)夫人(夫人)が自分(自分)の罪(つみ)を悔(く)いて自殺(じく)しやうとしたのを  
 制止(せいし)すると共に其(その)の罪(つみ)を許(ゆる)し、改めて松子(まつこ)と親子(親子)の名乗(なま)りをしや  
 うと思(おも)つて居(ゐ)たのであるから。

「ウム松子(まつこ)さんにも種々(いろいろ)用事(ようじ)があるから一先(ひとま)づ邸(やしき)へ來(き)て下(くだ)さい」

「はい……」

今は辭退(じたい)すべき場合(ばい)でないので松子(まつこ)も共に本山邸(ほんさんぢ)に歸(かへ)つた、さ  
 うして改めて帝都劇場(ていとげきやう)の松野露子(まつのろこ)は父(ちち)の本山男爵(ほんさん男爵)と親子(親子)の名乗(なま)り  
 した。

「父(ちち)うさん……」

「松子(まつこ)……」

奇(き)くしき運命(うんめい)に弄(もよ)ばれて十八歳(じゅうはちさい)の生涯(せいぎや)を父(ちち)無し兒(こ)で送(おく)つて居(ゐ)た  
 松子(まつこ)は生(な)れて始(は)めて華族(けつぞく)の父(ちち)を持(も)つことになつた。

幾干(いくせん)くも無(な)く松子(まつこ)は社(しゃ)會(かい)から其(その)の天(てん)才(さい)を惜(お)しまれつゝ、帝都劇場(ていとげきやう)  
 の舞臺(ぶたい)を退(ひ)いて本山邸(ほんさんぢ)の人(ひと)となつてしまつた、然(しか)し母方(ははかた)の家(い)を  
 繼(つ)かねばならぬので姓(せい)は山田(やまだ)を名乗(なま)つて居(ゐ)た。

此(こ)の事(こと)があつてから間(ま)も無(な)く本山竹子(ほんさんたけこ)と殿村讓(とのむらじやう)の婚約(こんやく)が成立(せいりつ)し  
 た、さうして松子(まつこ)へは某子爵家(ぼうしやくけ)の次男(じきなん)が是非(せいひ)共(とも)と云(い)つて養子(やし)とな  
 った、讓兄妹(やぶせうまいたい)は本山家(ほんさんけ)に出入(でいり)して居(ゐ)る、敏雄(としお)と殿村(とのむら)の妹(いもうと)咲子(さきこ)は同  
 じく戀(こひ)の人(ひと)となつたらしい、浪子(浪子)が或(ある)日(ひ)庭(にわ)の亭(てい)で咲子(さきこ)に向(むか)ひ。

「咲子(さきこ)さん、竹子(たけこ)は貴女(あなた)の兄(にい)さんの處(ところ)へ嫁(よめ)ぐ事(こと)になりましたか  
 ら、其(その)代(か)りに貴女(あなた)は敏雄(としお)の處(ところ)へ來(き)て下(くだ)さいませんか」

と、笑い乍ら其の意向を訊すと美しい面を真赤にした咲子は。  
 「妾しのやうなお轉婆は敏雄様のお氣に召しませんわ」  
 と、耻かしさうに頭を下げた、けれども心の中に嬉しいと見え  
 て鈴を並べたやうな双の眼は希望の色が急に輝いた。  
 久しく冷たい風の吹き荒んで居た本山の家には不斷の春風が吹  
 き初めた。

# 罪つみ

(後編) (終)

大正三年十月十日印刷  
 大正三年十月十五日發行

定價金五拾圓

有所權作者

(附典編後罪)

著者 島川七石  
 發行所 大坂市南區渡邊中町  
 二百二十四番屋敷  
 樋口源次郎  
 大坂市西區阿波座中通  
 二丁目四番地  
 荒木佐兵衛  
 大坂市西區阿波座中通  
 二丁目四番地  
 浩進舎

發賣元 大坂市南區三休館  
 渡邊谷南へ入四番

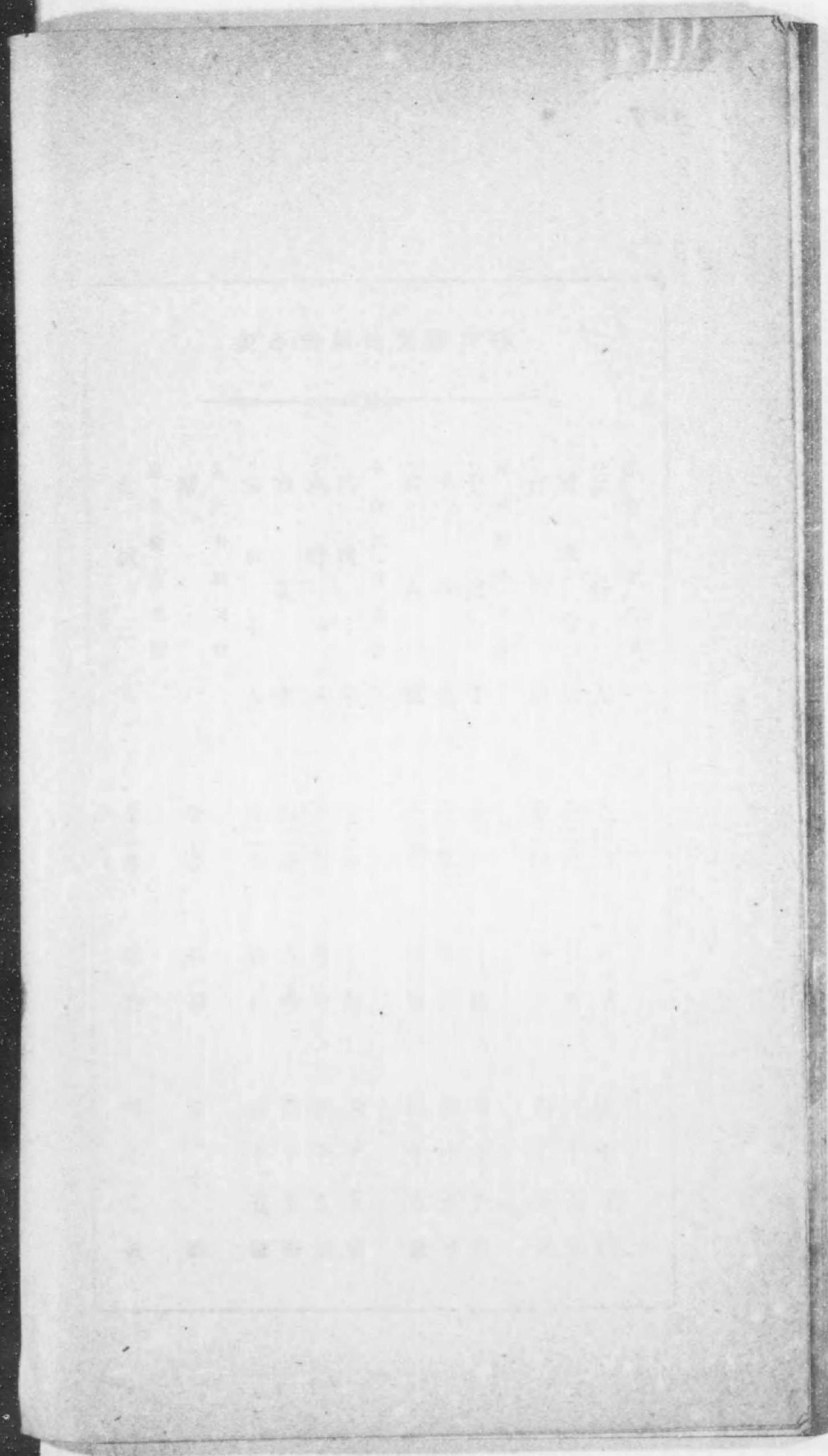
樋口隆文館  
 (振替口座大坂八七九七)

## ◎樋口隆文館 營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版に及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君に及ぶ資本を營業とせられ諸君は多少に拘らず御注文被下度候  
 △卸賣目錄御入用の諸君は郵券三錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本願ふとしてなるや御書き添へを願ふ  
 △樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新出版發行致べく候  
 △樋口隆文館の所在地は大坂三休館渡邊谷南へ西側に御座候、振替番號は大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料總て御前送相成度候着金後  
 大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料總て御前送相成度候着金後  
 其他成丈は早く届く方法を以て御送品可致候







終

